

Foreword

新時代の歴史教育者たち History Educators in a New Era

担当：川口広美（広島大学大学院教育学研究科）

hkawaguchi@hiroshima-u.ac.jp

■著者情報

名前：Peter Seixas

略歴：バンクーバーで高等学校社会科を15年間教えたのち、カリフォルニア大学でPh.D.取得。UBC 歴史意識の研究センター長、ブリティッシュコロンビア大学(2016年6月退職、名誉教授)

研究テーマ：カリキュラム研究、歴史教育と歴史意識、教育学、社会科教育研究、集合的記憶、歴史意識

有名な論文や書籍：

Stearns, P. N., Seixas, P. C., & Wineburg, S. (Eds.). (2000). *Knowing, teaching, and learning history: National and international perspectives*. NYU Press.

Seixas, P. C. (Ed.). (2004). *Theorizing historical consciousness*. University of Toronto Press.

Seixas, P. & Morton, T. (2013). *The big six: Historical thinking concepts*. Toronto: Nelson Education.

■重要用語

- Alternative facts: オルタナティブ・ファクト、代替的事実

※元々は、2017年のTVインタビューにおいて、アメリカ合衆国大統領顧問ケリーアン・コンウェイが行った発言。ホワイトハウス報道官のドナルド・トランプ大統領就任式に関する虚偽発言を擁護するために飛び出した言葉。

- post truth: 「ポスト真実」

※客観的な事実が重視されず、感情的な訴えが政治的に影響力を生み出すこと。

- positionality: ポジショナリティ

- cultural turn: 文化論的転回

※意味論が中心に置かれるようになったこと

■ひとこと概要

本章は、現在の社会的文脈(=トランプ時代)において、歴史教育及び歴史教育研究がどのような意味があるのかを書き、この本の置かれている意味や位置づけを示している。具体的には、①「ポスト真実」時代であり、真実がゆがめられていること。また、②絶対的なリベラリズムの伝統が崩壊し、過激なポピュリズムが台頭していることがあげられている。これに対し、歴史教育が、①民主的価値を伝えるもの、②社会正義の観点から周縁化された人々を中心化させる、といった役割を果たすべきだと主張している。

■ まとめ

①近年の歴史教育研究分野の動向

- ・歴史教育分野についての国際的対話が充実。歴史教育研究の範囲が大幅に拡大
(背景) ドイツ・イギリス・オランダ・アメリカなどの初期の国内での動きがベース
⇒AERAのTeaching Historyのspecial interest groupに代表される国際的なネットワーク・コミュニケーション・会議が開催
- ・本書は、歴史教育研究領域の研究がどこまで進んだかに関する信頼性におけるレビュー+今後の方向性に関する基点として機能するだろう。

②現在とは

- ・不安定化 (destabilization) : 富の偏り、移民の急増、コミュニケーション⇒ネオリベ化
 - ・トランプ時代の到来: 軍事への優遇、ヘルスケア⇒銃所有権重視、富の不均衡な集中、「この日から前に進もう。新しいヴィジョンが我々の国を支配するだろう (=過去を余り意識しない)」
⇒長期的な国際的安定に挑戦的な姿勢
- ※同様な傾向は、ヨーロッパの民主国のポピュリスト政治家 (フランスのルペン、イギリス: ファラージなど)
- ・トランプの思想「過去を忘れて未来を見据える」
⇒これ自体は古くからある思想。未来を現在とは異なる時代とみなす。しかし、リベラリズム重視の前提は共有されていた。(だが、トランプの“alternative facts”(もう1つの事実/代替的な事実) レトリックによって、その前提すら崩してしまう)

③研究者たちへの影響

- ・「真実」概念のゆらぎ: 研究と知識、解釈と証拠、コミュニティと国家、アイデンティティと違い、シティズンシップと連帯といったものの関係性自体も見直す必要が出てくる。
⇒過去数十年間で蓄積されてきた「知識生産におけるポジショナリティ (positionality) や situatedness (状況的) といった社会文化的アイデンティティを考察すること」の意義が見えにくくなってしまった (Crocco: 13章)
- ・前提: 人の経験や信念によって解釈が異なる: 社会科学・教育学・歴史科学 (historical science) の中核
⇒その前提として、対話・議論・討議・証拠に対する共通の尊重に基づかなくては!
- ・現在の状況では、アイデンティティ・ベース理論・研究方法・「認識論」「存在論」を個別で用いて遊ぶ余裕はない (なぜなら、それは新たな「別のものに向かう」を生み出してしまうから)

④歴史解釈を教えることへの影響

- ・歴史教育研究者の関心: 教科書内の記述や物語の不安定性、過去の事実と過去の解釈の違い
⇒解釈の限界、証拠の重さによって支持される解釈を擁護することの重要性を理解することが重要だった
- ・現在の政治的・社会的・経済的状況: 大衆文化の「壮大な物語」を変えている
⇒ここは歴史教育が果たすべき役割が大きい。ナショナリストのゆがみに対抗できるツールを提供。

⑤これまでの歴史教育研究との関連性

・学生のジェンダー・セクシャル・人種的アイデンティティに焦点化：ポジショナリティが歴史的理解をどのように形成しているかに貢献。歴史的に取り残されたコミュニティの認識と国家権力への抵抗へ焦点を。

(例) 歴史的意義：アイデンティティ集団で過去理解が変化：LA ラテン系アメリカ人の重要な出来事⇔ボストン人の子孫の重要な出来事

・歴史教育者は、これらの記憶に注目し、共通の理解に向けて構築するより大きな物語を促進させる必要があるのではないか。(ただし、これらが民主的価値の変容を可能にする価値が蔓延した文脈で行われることには注意)

⑥意義の変化

・解体⇔民主的統治の契約と義務、平和な戦後ヨーロッパシステムの達成、制度的な規範の重要性を教える必要性があるのではないか

(例：民主社会の機能を学ぶことを中心においたカリフォルニア歴史—社会科学フレームワーク)

※我々はもはや、民主的価値を暗黙の前提としておくことはできない

・トランプ：「最後のゲマインシャフトマン」(by Brooks)：個人的な忠誠心や関係性を重視する⇔しかし、それはゲゼルシャフト(軍隊・事務・官僚)を獲得するため

※ゲマインシャフト(血縁・血縁・友情により自然発生した社会集団)とゲゼルシャフト(機能体組織)

・これまでの社会は、ゲゼルシャフトを重視(非個人的・ルールベース、抽象的、間接的、フォーマル)

⇔しかし、近年の研究では個人的な歴史と周辺の遺産との関係性の見直し、『家族的・経験的・触覚的』な歴史教育の重視

・これは、社会史から「文化的転回」を経て、記憶研究にいたった経緯と類似

(前提) 歴史学=過去を理解するための1つに過ぎない。「すべての人が行うもの」(カールベッカー)

(例：ポスト・フーカルド派：歴史学は歴史理解の方法論の1つ：史料の使用は神話。理由付けの使用も神話)

⑦本書の位置づけ

・トランプ時代に示唆する例

：・Goldberg & Savenjie (19章)：「ポスト真実」時代：まっとう(sane)で、合理的で証拠に基づく代替案を支持することの重要性を指摘

・Crocco(13章)：多様性(中でもジェンダーやセクシャリティ)により注意を払うべき

⑧おわりに

・現在：学者や知識人が主体とならなければならない瞬間だ

⇒(民主的価値のように)以前はなかった擁護を擁護する価値がある。

・「歴史教育者はレリバンスの端に自分を置くのか?」「それとも、中心に向かって移動べきか?」

※次ページ以降を読んで、考えて欲しい!